

保育施設におけるコロナ感染対策と音楽表現活動

神原 雅之 岡林 典子
(児童学科教授) (児童学科教授)

ここでは保育施設のコロナ感染対策の状況や、その中で音楽活動はどのように行われているか実態を明らかにするために調査を行った。その結果、各園では、①換気、消毒、手洗い、3密回避などの対策を採られている、②概ね1~2歳児はマスク着用無し、3~5歳児は場面に依りて柔軟に対応されている、③表現活動は減少傾向にある。特に、歌唱や鍵盤ハーモニカの活動の減少が著しい、④発表会は時短、入場制限、時差等を講じて催されている。これらを基に、保育者養成の音楽教育に示唆されることについて考察した。

キーワード：コロナ感染、幼児、音楽表現、実態調査、保育者養成

はじめに

2020年初頭から世界的に流行し始めたコロナ感染は、私たちの日常生活に大きな影響をもたらしている。流行当初は、コロナに感染しないためにどのような対策を講じたらよいのか情報が交錯した。様々な報道を通じて、感染対策の基本的情報（3密の回避、マスク着用など）が人々の間に共有されるようになった。現在は第8波の最中である。私たちは徐々にウィズコロナの生活に馴染んできた。ここに至る迄にはワクチンの開発・接種が浸透し、当初の不安な状況は改善されてきている。

コロナ禍は教育活動にも大きな影響を及ぼしている。特に、音楽実技指導への影響は大きい。音楽会は中止され、合唱や吹奏楽などの活動は自粛を余儀なくされた。3密回避、マスク着用などによって実質的な教育活動ができない状況に直面した。

そこでクローズアップされたのがオンラインを用いた双方向型遠隔授業である。この種の報告はコロナ感染以前にもみられた（深見ほか2009）が、2020年度以降その数は増加傾向にある。コロナ禍の音楽指導について概観し、弾き歌いの指導を遠隔で実践した報告など先行研究は多い（石川2021；葛西2021）。筆者らも2020-22年度に取り組んだ遠隔授業について報告した（神原・岡林ほか2022）。

さて、コロナ禍は保育施設も無縁ではない。その実情

を報じた論文は幾つかあるが、コロナ禍の中で幼児の表現活動がどのように実践されているかという報告は未だない。そこで本稿では、コロナ禍における幼児の音楽活動の実態について把握することを試みた。この把握を通して、保育者養成の音楽教育について考える一助としたい。

1. コロナ禍での養成機関における音楽・表現教育に関する授業の取り組み

2020年初頭から世界的に流行し始めた新型コロナウイルスの影響は、大学教育の授業形態を大きく変えるきっかけとなった。コロナ禍に伴い、養成機関における音楽や表現に関する対面授業は、オンラインでの実施や対面授業とのハイブリッドでの形態を余儀なくされ、担当教員は様々な授業内容や方法の工夫を試みている。ここでは、そうした取り組みからみえてくる実践の成果や限界について述べる。

山田・横田(2021)は、造形・音楽・身体表現を連携させた総合表現の授業に取り組んでいる。コロナ禍での授業形態の工夫として、グループごとに表現創作に取り組み、スマートフォンで撮影した動画をオンラインで鑑賞するという方法を試みている。山田らは、グループ表現の発表を動画収録によって行うことについて、遠近法を使った撮影やテロップの挿入など動画作成の工夫はみ

られるが、カメラの画面枠に向けての表現発表では対面で発表することに比べて表現が小さくなったことや、リズムや動きの同期など対面の場合に生まれる発表者と視聴者の一体感を持つことが難しいことを指摘している。

また、和田・田中(2021)は、これまで2018年度・2019年度に「声」と「音」に着目した総合表現の授業を試みていたが、音楽活動に制限が生じたコロナ禍の2020年度においては、授業テーマの「声」の部分で「リズム」に変更して、クラッピング（ハンドクラッピング、ボディクラッピング、足踏みを取り混ぜる）によるグループ活動を実践している。授業形態は対面授業とオンデマンド授業を合わせたハイブリッドで、受講生73名を担当者2名で2クラスに分けて対面人数を減らす工夫や、対面での発表会の動画をオンデマンドで鑑賞するという工夫もなされた。実践後、和田らは、「自由に動くこと、声を出すこと、身体接触、道具の共用が制限される感染防止状況下で、クラッピングは、言語表現活動と音楽表現活動を連携させた授業実践への可能性をもつ表現手段となったといえる。新たな表現手法とその可能性を知る機会となったこと」に意義を見出している。また、オンデマンドによる鑑賞を行ったことについて「自分のグループの発表を客観的な目で見、他のグループの発表と照らし合わせて、見る人が楽しめる表現のあり方を考えることができた。」「対面授業では見ることでできなかったもう一方のクラスの発表画像を見ることで、表現の仕方が多様にあることを知った。」など、コロナ禍での授業形態の変更によってもたらされた学生の学びについて言及している。

しかし、一方では、空間の使い方、表現の隊形、声の使用について、実践の限界があったことも指摘している。例えば、正常時であれば動きながら効果的に空間を利用したり、多様な隊形で表現したりしたであろうが、感染防止を意識した結果、そのような表現がなされなかったことや、感染防止のため声を出すことが憚られる状況下であるため、練習においていろいろな音高の声を心置きなく発する表現活動にはならないことなど、コロナ禍の教材として限界があったことも認めている。

また、岡野・平田(2022)は遠隔授業となったピアノ個人レッスンについて、学生の多くが対面授業を望んでいることを理解した上で、学生へのアンケートより得た遠隔授業のメリットとして「レッスン時間のギリギリま

で練習できること」「終了後もすぐに練習に取りかけられること」などを挙げている。一方で、「電波が悪い」「音と画像がずれる」「先生の手の動きがわからない」など、遠隔レッスンにはデメリットが大きいことを指摘している。

以上の取り組みからは、遠隔授業のメリットとデメリットの双方が認められるが、コロナ禍の終息がまだ見通せない中での養成機関の授業は、それらのメリット、デメリットを理解しながらも、続けて授業方法と内容を工夫する必要がある。

2. K 幼稚園のコロナ対策と表現活動

筆者らは、コロナ禍において園生活で不自由なことや、コロナ流行前には見られなかった園児の姿などを教えて頂くことを目的として、幼稚園を訪問した（2022年7月25日午後、京都市の私立K幼稚園）。お話を窺ったのはS主任教諭であった。その結果を表1に纏めた。

表1 聞き取り調査の結果（要約）

マスク：室内ではマスクを着用している。戸外ではマスクは外している。マスク着用は保護者の意向も窺いながら対応している。マスクは熱中症のリスクもある。現在は（感染状況をみて）食事以外はマスクを着けるようにしている。

歌唱：仏参で歌を歌うときには「小さな声で」「優しい声で」と声をかけている。園児は大きな声で歌いたくなるようだが。マスクは表情が見えない、口の動きが見えない（マウスシールドも使ってみたが馴染まない）、言葉が伝わりにくい。これは残念なこと。現在は場面に応じてマスクの脱着を考えても良いのではないかと思う。

発表会：コロナ流行当初（2020年）は歌唱を控えた。季節の歌も歌わなかった。音楽会で歌は止め、合奏のみとした。コロナの状況を観て、2021年2月の発表会では歌も合奏も取り組んだ。舞台上では一人ひとりの立ち位置を離して並んだ（ステージ上に高い段、低い段などを設けて上下左右に距離をとって並んだ）。以前は全園児合同で実施していたが、密を回避するために学年別で実施した（時間帯を変えて開催、保護者入れ替え）。マスクばかりの写真しか残らないのは辛い。そこで（合奏の時）本番寸前にマスクを外した。歌あそびはマスク着用。ステージを退

場するとき一人ずつ自分の名前などと言う機会がある。その時はマスクを外して話すようにした。マイクを準備し、園児の小さな声を拾うようにした（マイクの消毒はその都度実施）。2022年の学園全体行事では、歌はやめて合奏で参加した。園児の歌いたいという気持ちを受け止めながら対応している。

S教諭のお話の中では2022年2月に開催された音楽会の映像も視聴させて頂いた。園児の歌声は伸びやかで活気に満ちていた。感染対策として採られた様々な工夫（マスク脱着、3密回避、並び方、マイクの準備など）も拝見することができた。

ここで教示して頂いた内容を基礎にして、次項で述べるアンケート調査の準備を進めた。

3. 保育現場におけるコロナ対策と音楽表現活動

3-1 目的：コロナ禍の中、保育施設においてはどのような対策が採られているのだろうか。そして音楽表現活動の状況を把握するためにアンケート調査を実施した。

3-2 方法

時期：2022年10月中旬～11月初旬

対象：京都市内の幼稚園（41園）及び保育園（54園）計95園。この内、回答数は71園（回収率74.7%）であった。

手続き：予め作成したアンケート用紙（A4版2枚）を郵送し、約2週間後をめどに返送して頂くように依頼した。

3-3 結果と考察

1) 調査対象のクラスとその人数

アンケートに回答して頂いた園およびクラスの数

を表2に示した。この表から、回答者は5歳児クラス担任による記入が多いことがわかる。

表2 回答していただいたクラス数と人数

クラス	園数	平均人数
5歳児	33	26.2
4歳児	9	27.8
3歳児	9	21.2
2歳児	2	20.0
1歳児	1	24.0
異年齢混合	6	無記入
無記入	11	無記入
計	71	

2) コロナ感染対策

各園のコロナ感染対策をみてみよう。感染対策を「行っている」園は70園（99%）、無記入が1園であった。つまり、ほぼ全園で取り組まれていた。そこで具体的な対策について尋ねた。その結果を図1に示す。

図1に掲げた項目について、各園では、総じて高い割合で感染対策に取り組まれている。この中で「3密回避（66%）」「うがい（59%）」の値が低い。この背景には様々な事情があるように思われる。ここで自由記述をみてみよう。その結果を表3に纏めた（紙面の都合上、重複した回答は集約した）。この表から、各園で「消毒」「検温」「換気」そして「3密回避」に努めておられることがわかる。

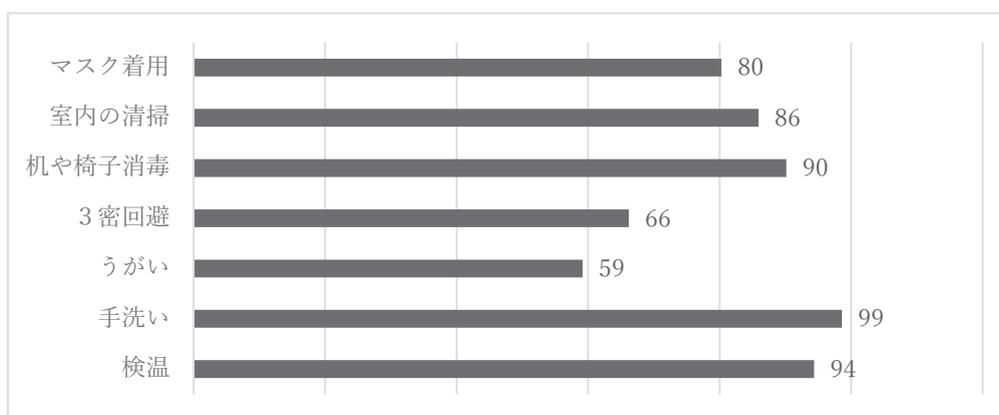


図1 コロナ対策の実施状況 (N=71, 単位%)

表3 各園の感染対策（自由記述の抜粋）

<p>【食事中】</p> <ul style="list-style-type: none"> ◆ペーパータオルの使用 ◆食事中のパーテーション設置 ◆黙食（保育者は園児と一緒に食べない） ◆食事や午睡の園児の位置の記録（陽性者が出た時に濃厚接触者を特定するため） ◆食事、午睡等は毎日同じ場所にし、感染拡大防止や感染発覚時の対応に備えている ◆昼食は同じ方向を向いて着席、人数を半分に分けている。時間の記入をしている ◆うがいは飛び散らないように静かに行う。感染拡大の時はうがい中止 ◆子どもの席に距離を取る、机一台に幼児2名でパーテーションをし、同じ方向で着席
<p>【消毒】</p> <ul style="list-style-type: none"> ◆保護者が園内に入る前に消毒、検温をして頂き、子どもは入室前に消毒をしている ◆トイレなどの子ども達が触れる所の消毒（ノロウイルス防止も含めて） ◆玩具を定期的に消毒 ◆手指消毒はアルコールがダメな肌の子に使う酸性水と使い分けしている ◆のり、ハサミなどはすべて個人持ちに切り変えた ◆おもちゃの消毒は毎日実施。保育後に部屋、ロッカー、扉等すべて消毒。配膳時、職員は手袋。園バスは幼児が降りるたびに座席の消毒など ◆コロナだけでなく、インフルエンザ等の感染予防としてジアイーノを設置している
<p>【検温】</p> <ul style="list-style-type: none"> ◆検温は家庭で実施

<ul style="list-style-type: none"> ◆検温（以前は健康観察表を作成し、毎朝提出してもらっていた）は、アプリを利用し、毎朝の体温を記入してもらっている ◆検温はスタンドタイプのものを設置（前に立てば平熱か否かを察知してランプが点滅） ◆保護者の方にも健康観察表を配布し、行事当日前5日間検温し、記入し、当日その表を持参してもらう ◆入室時に検温
<p>【換気】</p> <ul style="list-style-type: none"> ◆空気清浄機、扇風機を設置し、常に換気 ◆保育室、バスなどは窓を開け、換気は十分に行っている ◆窓をあける、換気扇をつけるなどで喚起をする
<p>【保育活動】</p> <ul style="list-style-type: none"> ◆自由な場所で歌ったり絵本をみたりしていたのを、常に椅子に座り、一定方向を向いて一定の距離をとる形にしている ◆年齢ごとに活動、異年齢が集まらない、朝夕の合同保育は密にならない ◆異年齢の交流を控える。送迎は1家族1名（小学生等の兄弟も控えてもらっている） ◆合同仏参時は間隔をあけて座る ◆食事の時に感染リスクが高い。向かい合って楽しく食事タイムということが出来ないことがとても残念です。黙食はさすがに出来ません ◆子ども一人ひとりの間隔を十分にとり、歌う・踊る・リズム遊びなどの活動をしている

3) 保育中のマスク着用

幼児のマスク着用はどのように指導されているのだろうか。その結果を図2と表4に示した。

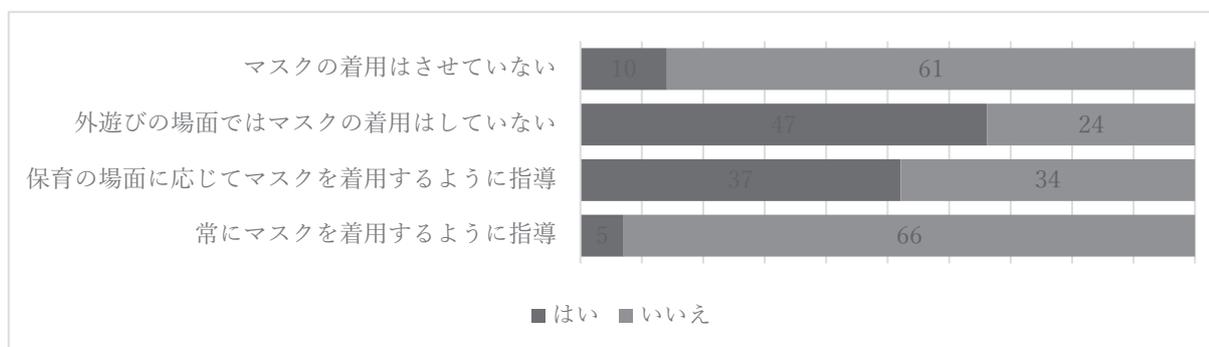


図2 マスク着用について (N=71, 単位%)

表4 マスク着用について（自由記述の要約）

- ◆1～2 歳児はマスク着用無し, 3～5 歳児も基本的にマスク着用を勧めていない（保護者の判断に一任）、マスクの着用は職員のみ
- ◆3 歳以上はマスクを着用（外遊びではマスクをしない）、2 歳以下はマスクをしない
- ◆園外へ出る時にマスクを着用する
- ◆マスクは職員のみ常時着用。園児は登降園時と咳の出ている子だけマスクを着用している
- ◆マスクは流行時やクッキング等、時と場合によって着用
- ◆1 歳児 2 歳児はマスク着用していない, 3 歳以上は保護者の判断
- ◆激しい運動時は外すようにしている
- ◆2022 年度春頃まではマスクを着用するよう指導

していたが、その後は任意としている

- ◆登園時やバス乗車時など、人が集まる場でマスク着用を確認している
- ◆室内においてもリズム遊びの時は着用しない
- ◆（暑い時期の）外遊びではマスクを外し、涼しくなれば着用している

1～2 歳児ではマスク着用を求めない園が殆どであった。3～5 歳児も場面に依拠して着用の有無を判断されている。無理のない柔軟な対応を模索されていることがわかる。

4) 音楽活動への影響

音楽活動への影響についてみてみよう。コロナ感染は「音楽的な活動に影響を及ぼしていると感じられているか」を尋ねた。その結果を図 3-1 に示した。

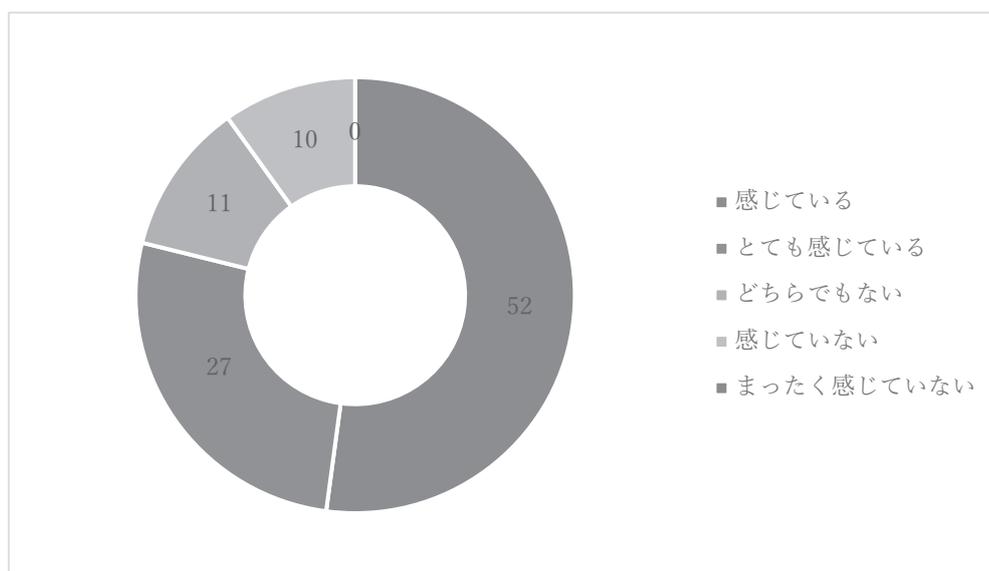


図 3-1 音楽的な活動への影響について (N=71, 単位%)

図 3-1 に示されているように、約 8 割の保育者がコロナの影響を感じておられる。そこで、「感じている（5 点）」から「まったく感じていない（1 点）」までの 5 段階評価を求めた。その結果、平均 3.96 (N=71, SD=0.88) であった。この値は、保育者がコロナの影響を強く感じられていることを裏付けている。

保育者の注意は何に注がれているのか明らかにする

ために、自由記述の文章を基にしてユーザーローカル AI テキストマイニングによる分析（<https://textmining.userlocal.jp/>）を行った。その結果を図 3-2 に示した。この図から、保育者の注意は、「うたう」活動と「鍵盤ハーモニカ」の活動に向けられていることがわかる。ここには、マスク着用による歌い難さや飛沫感染リスクに対する懸念があるように思われる。

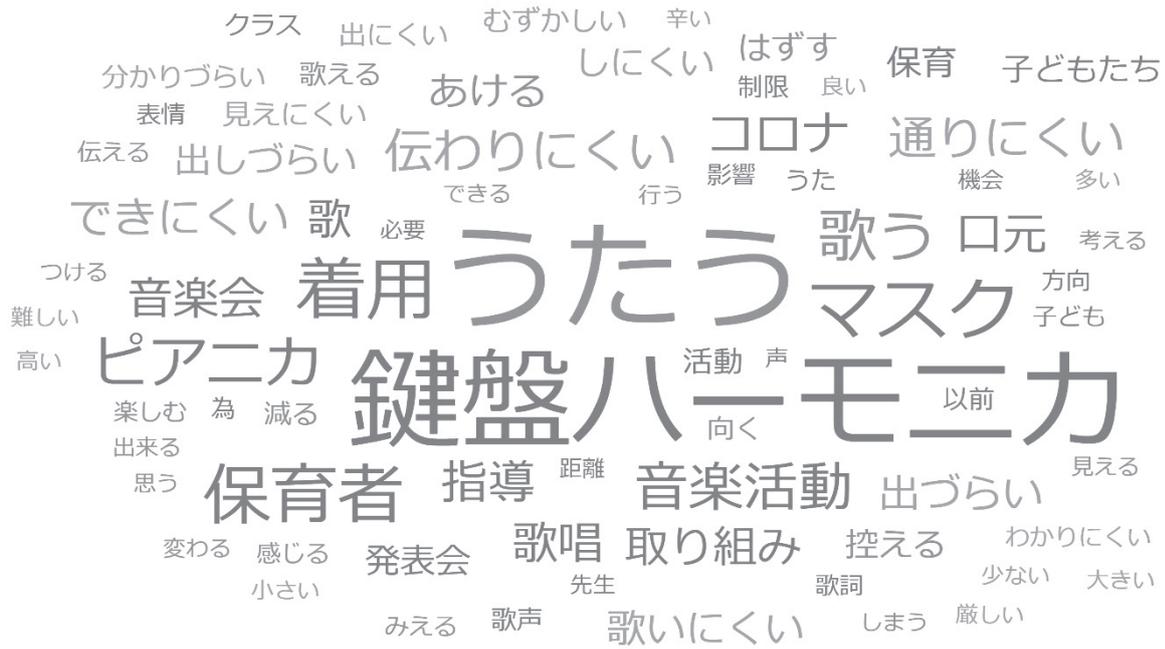


図 3-2 音楽表現活動におけるコロナ感染の影響

5) コロナ禍における表現活動

表現活動の頻度について尋ねた。ここでも「とても増えた（5点）」から「とても減った（1点）」の5段階評価を求めた。その結果を図4に示した。ここに掲

げた活動は、いずれも3点より低い。つまり、感染拡大によって音楽活動は減少、特に「歌う」活動の減少が著しいことがわかる。

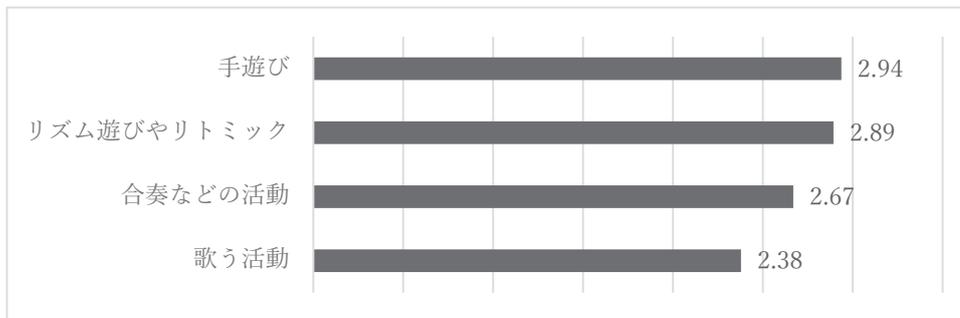


図4 コロナ禍以前と比べて表現活動はどの程度行われていますか (N=71)

表5は、歌唱と鍵盤ハーモニカの活動について記された自由記述を要約したものである（同種の意見は集約した）。各園で採られた具体的な様子を知ることができる。

表5 鍵盤ハーモニカ、歌唱に関する対応

【鍵盤ハーモニカ】

◆鍵盤ハーモニカや歌唱はマスクをはずして活動している

◆机に4人ずつ座っていた所を2人掛けにした（向かい合うのをやめて一定方向を向いて座る）

◆感染状況により少しずつ活動内容を変えていった。初期の頃は歌唱や鍵盤ハーモニカの活動を中止した。これは子どもたちの成長に影響を与えてしまったように思う

◆鍵盤ハーモニカを吹く人数を半数にし、それを交互に行っている。鍵盤ハーモニカのパイプはその都度子ども自身で洗い乾かしている

- ◆鍵盤ハーモニカの活動時間を15分間に短縮。鍵盤ハーモニカは3～5歳児対象、以前は本体を共有（ホースは個人持ち）していたが、いまは本体・ホース共に個人持ちにしている
 - ◆鍵盤ハーモニカは使用しない。木琴やベルを使用して音階あそびを行った
- 【歌唱】
- ◆歌を制限されている時は、手あそびなどをたくさん取り入れるようにした
 - ◆現在（2022年秋）は音楽活動も換気などの対策をしながら通常通りに行なっている
 - ◆去年はコロナが蔓延中だったので卒園式で歌う曲数を減し、歌うときはマスクを着用した
 - ◆子どもは呼吸機能が未熟な上、熱中症の心配等もある。言葉の発声をする又周囲の大人がしっかり幼

- ◆児の声を聞き取るために幼児はマスクを不要とした
- ◆歌う活動は昨年度までは控えていた、令和4年は合唱を行う予定

6) 発表会等の実施

発表会はどのように催されたのだろうか。まず、回答者全体に「発表会の開催に影響があったか」尋ねた。前述同様、「とても影響した（5点）」から「まったく影響しなかった（1点）」の5段階評価を記入して頂いた。その結果、平均4.23（N=71,SD=0.66）であった。これは多くの園でコロナの影響を強く感じられていることを裏付けている。

発表会開催に伴う具体的な対応策について尋ねた。その結果を図5に示した。表6には自由記述に記された各園の取り組みを纏めた。

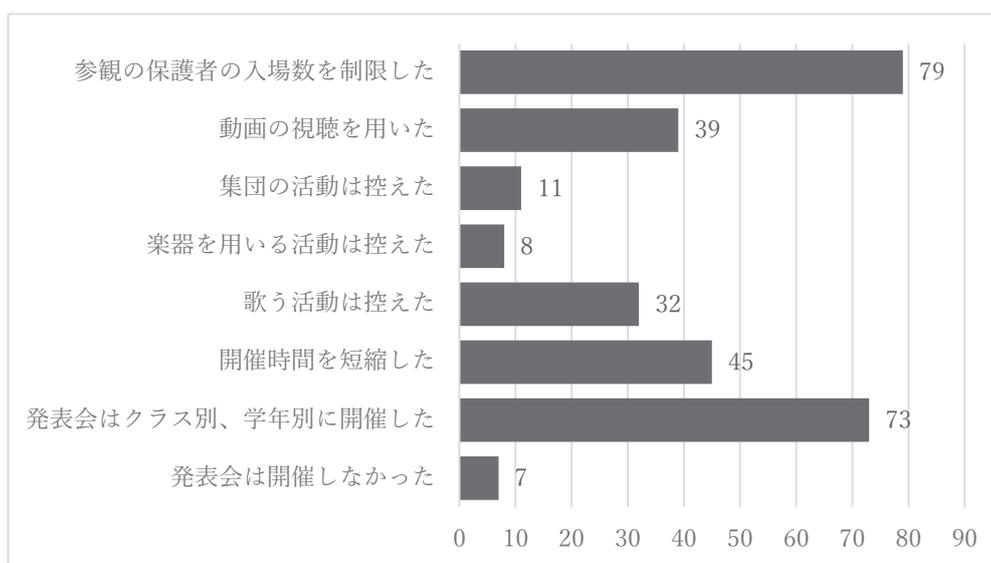


図5 各園で採られた対応策（N=71，単位：%）

表6 発表会等の行事における取り組み
（自由記述の要約）

- ◆参観の保護者の入場者数を制限した（昨年までは1家族2人、今年は3～5人程度）
- ◆2020年度は開催せず、ビデオ撮映をして保護者に観て頂いた
- ◆歌や合奏時の並び方は前後左右の間隔を広くとり密にならないようにした

- ◆去年は発表会直前にコロナ陽性者がおられたので動画で観ていただいた
- ◆参観保護者のマスク着用、消毒をした
- ◆去年の運動会は無観客で開催し、DVDを配布
- ◆行事はこどもの成長の一つの節目と捉え、できるだけ工夫して開催する方向で考えている
- ◆年長の発表（リハーサル）を年少が見学する等のクラス交流が減ったので、互いの伝え合い（技術面

や気持ち、取り組み方など）の機会が無くなるのは良くない。今年度は年長1クラス+年少1クラスのように互いの発表を観る機会を作っている

◆2020-21年度は行事の時に園児と大人（保護者）の接触が少なくなるよう入室や退室の導線を工夫

◆2022年度の室内行事は人数制限し、運動会は時間短縮し、食事無しで実施した

◆運動会や作品展、夏祭りなどの行事を学年別、時間差で催した

◆従来の夏祭りでは在園児と保護者そして地域の子どもや卒園児を招いているが、今年度は在園児と保護者（子ども1人につき保護者1名）に限定し、学年ごとに時間をずらして催した

◆全クラス集まっての行事はやめて、クラスごとに職員がまわるなど工夫。誕生会も各クラスで。誕生日には誕生時だと分かるワッペンをつけ、クラス外からもお祝いの言葉をかけてもらえるようにした

7) 各園の工夫

感染対策に関して各園の工夫や思いを自由に記述して頂いた。それをユーザーローカル AI テキストマイニング (<https://textmining.userlocal.jp/>) を用いて分析した。図6はその結果である。この図から「消毒」「検温」「鍵盤ハーモニカ」などの予防対策に注意が注がれていることがわかる。自由記述には、コロナ禍に対する各園の強い思いも多く記載されていた。そ

れを表7に纏めた。ここにはコロナ禍の中で子どもたちにとって何が最善なのか真摯に模索されている様子が窺われる。

表7 コロナ感染に対する各園の考え方
(自由記述の要約)

◆感染予防に神経質になりすぎない。以前から手洗いやうがいができるようにしている

◆コロナに対して悪いイメージがつくと感染した時や感染者に対しての言動につながってしまう恐れがある。心の対策が大切だと思う

◆絵本等でコロナについて子ども達に伝えるようにした

◆子どもはマスクを上手に着けることができる。習慣化すると服を着るのと同じである

◆給食中の会話は控えている（結果的に食事時間の短縮にもなっている）

◆子ども達には可能な限りコロナ以前と同じような経験をさせてあげたいと思う。環境を整えて取り組めるように努めている（学年別で行う、保育室等の消毒）

◆コロナ感染対策に取り組みながらも子どものためにできることを考えている。コロナ以前のようにできないが、形を変えながら取り組んでいる（時間短縮、外でリトミックなど）

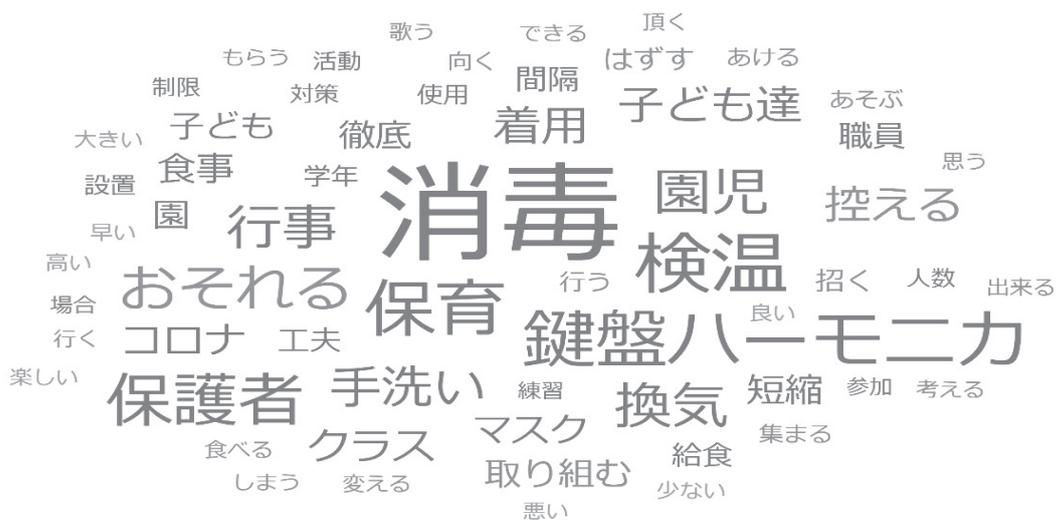


図6 自由記述「各園の工夫」の分析

おわりに

本稿では、コロナ禍における保育現場の対応と音楽表現活動の実態を明らかにするためにアンケート調査を行った。その結果、次のようなことがわかった。

・コロナ感染対策として、各園では換気、消毒、手洗い、3密回避などの予防対策に努めておられる。座席間隔や対面にならない座り方などにも配慮されている。

・1～2歳児はマスクの着用を求めない。3～5歳児は場面に応じて柔軟に対応されている。

・表現活動は総じて減少している。特に、歌唱や鍵盤ハーモニカの減少が著しい。

・発表会等の行事は、時間短縮、入場制限、時差開催などの対策を講じて催されている。

このような実態を踏まえて、保育者養成機関ではどのような対応が求められるのか考えてみたい。私たちは、今回のコロナ感染拡大を体験し、新しい生活習慣に馴染んできた。そして3密回避やマスク着用などの対策が有効であることを学んだ。今回の調査でも、各園でこれらの基本的対策を実行し、感染状況をみながら柔軟に対応されていた。しかし、その中で表現活動が十分に行えない現実も浮き彫りとなった。私たちはこの状況を克服するために、感染対策を講じながらもその中で可能な表現活動の方法を考える必要性に直面している。幼児期には他者との多様なかかわりを通して表現する楽しさを味わうことが求められている。例えば、他者と目を合わせたり、身体の動きを用いたりして、音を注意深く聴く活動などはその一例となるだろう。今後は、感染対策と表現活動を両立しながら、幼児が無理なく参加できる具体的な表現活動のあり方について模索していきたい。

引用文献

岡野七恵・平田道子(2022)「コロナ禍における授業形態の一考察—「音楽Ⅱ」の授業での取り組み—」『国際研究論叢』35(3), pp.231-249

山田悠莉・横田典子・滝沢ほだか(2021)「造形、音楽、

身体表現を連携させた保育内容『表現』の授業研究⑨: 動画を使った表現の可能性」、『日本保育学会第74回大会発表論文集』, pp.249-250

和田 幸子・田中 慈子(2021)「コロナ禍におけるクラッキング活動の教材性:リズムと言葉に着目した総合表現の授業実践を通して」, 関西楽理研究会編『関西楽理研究』(38), pp.39-63

参考文献

石川眞佐江(2021)「COVID-19 流行下におけるオンライン音楽実技指導の実際と課題」, 『静岡大学教育学部研究報告(教科教育学篇)』第53号, pp.134-142

葛西健治(2021)「子どもの歌のピアノ弾き歌い指導におけるオンラインレッスンの試み:コロナ禍の授業実践における成果と課題」, 『こども教育宝仙大学紀要』第12巻, pp.1-16

神原雅之・岡林典子ほか(2022)「保育者養成課程における音楽教育方法に関する研究:コロナ禍における「児童音楽Ⅰ」の授業を中心に」, 『京都女子大学発達教育学部紀要』第18号, pp.167-176

深見友紀子・中平勝子・赤羽美希(2009)「ピアノ弾き歌いにおける遠隔・非対面指導の効果と課題」, 『京都女子大学発達教育学部紀要』第5号, pp.31-40

謝辞 アンケート調査では、京都市内の幼稚園・保育園・こども園のご協力を賜った。また、聴き取り調査ではK幼稚園の新庄先生にご教示を頂いた。調査データの集計作業では、本学児童学科学生3名の協力を頂いた。この場を借りて厚く御礼を申し上げたい。

付記 本研究は、京都女子大学 令和4年度研究経費助成を受けている。

本稿の構成及び考察については神原が中心となって進めた。執筆は1を岡林が、それ以外を神原が担当した。